結城剛志報告「商品貨幣論の再構成」へのコメント

2021年10月23日(土)／東京経済大学学術フォーラム／「マルクス経済学の現代的スタンダードを語る」

北海道大学大学院
経済学研究院助教
海　大汎

まとめ

- 本報告は、マルクス経済学の貨幣論の枠内において現代の貨幣を理論的に根拠づける方法を模索・提案するものである。

「現代資本主義の特徴」

☞不純化しつつある資本主義の貨幣現象を解明するためにはマルクス貨幣論の再考が必要。

「マルクスの貨幣論」

☞現代の貨幣(不換銀行券／預金通貨)はマルクス(または宇野)金貨幣論では説明しえない。

「信用貨幣の捉え方」

☞金貨幣論は不換紙幣の登場によって無力化されてしまったが、だからといってその批判論としての「不換紙幣論」または「信用貨幣論」が説得的とも思われない。

「商品貨幣論の再構成」

☞複数種商品(資産)を抱える個別主体を想定し、その債務証書から物品貨幣と並び立つ信用貨幣の萌芽形態を抽象することで、貨幣研究の新たな展望を提示しようとする。

疑問点

⑴マルクス経済学の貨幣論はそもそも特定の商品が貨幣の地位につくという意味での「金貨幣論」または「財貨幣論」なのか。

⑵「変容論」においては物品貨幣と信用貨幣の出現が時間的に離れているが、「原理論」においては同時並列的な形をとるのはなぜか。

⑶マルクス貨幣論（価値形態論）は「物々交換」(スライド[10])をモデルにしているといえるだろうか。

⑷スライド[17]において「200頭の豚、30tの砂糖は鉄を獲得する手段となる」とされるが、それは《D:30tの砂糖 → 10tの小麦》が前提されていなければ成り立たないのではないだろうか。

⑸原理論において複数種商品と兌換できる「債務証書」が不換銀行券（現代の貨幣）の抽象形態として位置づけられる理由は何か。